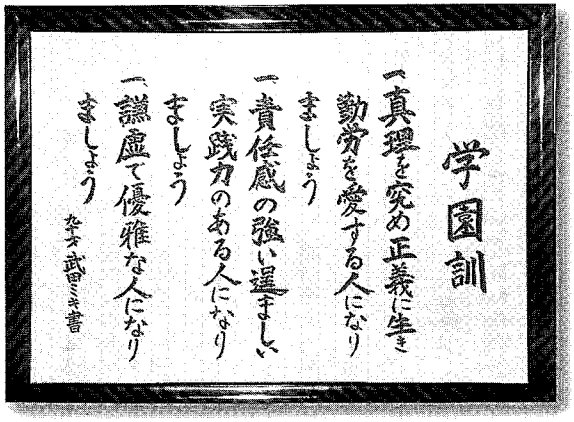
五　広島県可部女子専門学校創立

武田学園創立の動機

日本国未曽有の歴史的現実に直面した敗戦後の日本は、百八十度の方向転換を余儀なくし、まったく目も当てられぬ有様、国土は焼け野原となり、国民は希望も勇気もなく、まったく骨抜きの状態であった。軍国主義に代わる占領軍からの天下りの民主主義の導入、国民はこの民主主義なるものの本義が十分のみ込めなかったり、それをはき違えた自己中心主義、自己の本能を満足さすだけの自由や権利を主張する者などさまざまいた。世の中はまったく戦前の面影もなく、乱れ切った状態であった。

私の県庁での戦後二カ年は、この民主主義の真の意義を地域社会へ浸透さすべくひたすら努めた。堕ちるのは早いが、挽回はなかなか容



ミキ先生自筆の学園訓

易ではない。〝これではならぬ、悪化し混乱した社会世相、頽廃した道徳の正常化こそ急務である〟と考え、病弱な身も顧みず、敗戦日本の再建の一翼を担おうとして立ち上がって、昭和二十三年(一九四八)四月に武田学園を創立したのである。それは、新生日本の根幹となる真実に徹した堅実なる女性、すなわち社会環境の欠陥や忌まわしい社会風潮に惑わされることなく、如何なる苦難にも挫けることなく、強く正しく明るく生き抜く力を養うとともに、世界に誇る日本女性の美徳の高揚に努め、社会の浄化に尽くすことの出来る女性の育成を目指して発足したのである。

設立までの経路

昭和二十二年(一九四七)十月、頸の淋巴腺摘出後、しばらく静養した二十三年一月の寒い日であったが、里の兄のもとに学校を創ることの相談とともに、その援助を仰ぎにいった。そのときも腰の痛みが強くて、腰を両手で支えながら駅まで行った。当時は乗物も混雑していて、車中で腰かけることは、よほど早く駅に行ってホームで一時間も二時間も立って順番を取らねばならぬ状態だった。もちろん車中でも立って、腰を支えて揺られながら福山駅に着いた。

汽車から下りて、駅前の広場であげはんを売っていたので(これは私の幼い頃からの大好物)、一枚十円を二枚買った。弁当は平常県庁に持っていっていたアルミニウムの弁当箱にご飯をつめて持っていっていたので、駅前の広場の石の上に腰をおろし、その好きなあげはんをおかずに昼食をしようと思って食べかけた。美味しくなく、食べたくないので、少し食べてやめ、しばらく寒く冷たい風に当たりながら腰を休めていた。乗り物がないので、常石まで十六キロの道を徒歩で腰をかかえて歩き始めた。ところが、左足を引きづらなければ歩けないけれど、腰はかかえなくても歩けるようになったので、元気を出して五時間近くかかって実家にたどり着くことができた。

風呂に入り夕食をいただいて皆と話をしていたら、兄が相談があるのだろうと言う。兄は昭和十九年からリウマチ病で臥せっていたが、長年の病床であっても、兄の頭はしっかりしていた。そして人の心を見ることは誠に早く、そ

れがまた、的の外れない見方をする人であった。

昭和二十一年、まだ県庁に勤めているころ、婦人参政権が与えられた直後に、参議院に立候補したらという周囲の奨めがあった。ちょっとその気になったので、そのときも兄のところへ相談して応援を求めにいったのだが、すごくやかましく叱られて（女だてらに何を考えているのか云々）帰って来たことがある。そのときは、もちろん私も政治家としての自信もなく、またそれほど魅力があったわけではないので、叱られ諭されておとなしく帰ったのだった。

今回は、真剣に私の希望を話した。兄は今度は前のときのようにきつくは言わなかったが、おもむろに、今から仕事を始めることは、兄は賛成しない。その理由は、第一にお前は身体が弱い（女学校時代に慢性肋膜炎を患っている）。第二は女が五十近くになって何もたいした事はできない（当時四十八歳）。第三はお前はもう教育界では功なり名を遂げたのだ、これ以上のことはない。もう未練を持たず無冠となって気楽な余生を送れ、それが一番よいのだ云々……。「学校を創ることは悪いことではないが、経営するということは、容易な業（わざ）ではない。一教員として教壇に立ち、教え導いていくだけのことではない。たとえば、オルガンを買えばピアノが買いたくなる。スタンドピアノを買えばグランドピアノがほしくなるといった理屈で、事業というものはそんなに簡単にいくものではないのだ。特に教育一筋で生きてきたお前には、経営など出来はしない。それよりも身体あっての物種だ。その弱い身体をして何が出来るか。お前よりか、こっちが心配だよ。」と言って、てんで取り合ってくれない。「わしは学校作ることを応援するのが、たいぎいから言っているのではない。お前の身体を思って言っているのだから、それが分からなければいかぬ。とにかくもう一度よく考えてみよ。」ということで、第一回の会談は終わったのである。

兄自身は元来、教育事業、社会事業において地域に貢献（小学校の建造、道路拡張整備等々）してきている人なので、教育に対して理解のある人であった。そのとき、私に感じられたことは、兄は心の底から反対しているのではな

い。ただ私の身体を心配していることが第一と、第二は学校を創っても苦労する、そんな苦労を今からしなくてもよい、幼いときから不遇な子であったので、生涯苦労の連続をさせたくないという、ただ肉親の愛情からの言葉だと受け取れた。強いて兄の言葉をはね返して賛成の言葉をもらおうともしないで、そのときは帰って来たのである。

十日くらいたって、今度は手紙で「どうしてもやりたい。私は教育に生き、教育に死する覚悟と信念が出来ているので、苦労は覚悟の上です。教育のために苦労して身体が悪くなって死ぬのは本望と思っているのだからやります。どうしてもやります、応援して下さい。」と、もうこちらは決定していることを報告した。

そうしたら、兄の使いとして、私を乳児から育ててくれた姉の長男市川寿太郎を使いとしてよこした。そのときの甥の話に、「兄上が、あの子は（私のこと）一概な子で、言い出したら後に引かぬ子なので、やるといえば仕方がないよ、と言っておられたよ。」とのことであった。その兄の言葉は、正式な表面の返事でなく甥が裏話として私に聞かせたまでで、兄の返事は「苦労も覚悟の上、そしてこの仕事で死ぬのは本望だというなら反対はせぬ、やれ。しかし、よくよく考えて、一つ一つをきめ細かく計画を樹て、社会に迷惑をかけることのないように、大切なお子様をお預りするのだから責任の重大なることもよくよく心におさめて取りかかれ。決して大きな事をするな、お前が学校を創って聊かでも地域社会のためにお役に立ちたいという、その心がけでよいのだ。兄も出来るだけの応援はしてやる。」というのであった。

私もいったん決意したからには、誰が反対しても悪いことではないのだからやろうと思っていたのだが、何より頼りにする兄からの承諾を得たので、心も清々しく準備に取りかかることが出来たのである。何も無いなかからの発足なので、物心共にその苦労は筆舌には表わされない。

学校を創るという私の夢は、昭和八年文部大臣から表彰されたとき、小学校一年のときの恩師である全国の青年の

父と呼ばれた山本瀧之助先生の胸像の前で、終生教育に捧げますと誓った十五年前のときからである。いよいよその決意をしたのは、敗戦後の日本の乱れきった世相を見て、この時こそという気になったのである。昭和二十一、二年のころである。

そのころ、自分は動けない身体でありながらも、学校創立の心準備をしていたのである。いよいよ表にその意志を出したのは、昭和二十三年一月、兄の元へその意志を申し出たことからである。いよいよ、本格的な準備に取りかかったのは、二十二年十二月である。

開校までの経路

まず、学校の所在地であるが、私の発想が国土の一隅でもその地域において堅実な教育がなされれば、堅実な国家の一部分が出来るのだという論法から、本籍地の安佐郡の中心地である可部町に所在地を定めようと考えたのである。

建物から考えていかねばならぬと思い、可部町の町中を上へ下へ、また西へ東へと歩いてみたが、なかなか土地も建物も見つからない。探すにしても、相談する人もこの町にはいなかった。昼は建物のことで東奔西走、夜は学校設置申請書づくりに夜を徹した。

或るとき思い付いたのが、義弟が勤めていた三カ村組合立（三入・亀山・八木）の高宮中学校の校長、海渡先生である。そのころは長男も大学生で、アルバイトでその中学校で数学を教えさせてもらっていた。この二人から海渡校長先生の話はよく聴いていたが、秀才で識見豊富で誠実で教育熱心な方だという。

そこで或る日、海渡先生に面会を求めに行ったところ、快くお会い下さった。学校を創設したい旨を話したところ、賛成して下さり「自分の出来ることは手伝ってやるからやりなさい。」と励まして下さった。その励ましのお言葉に、私は一段と勇気が湧いてきた。

その後間もなく先生から「可部町の中屋に元の高宮中学校の校舎であった建物が競売になるそうな。何日何時が入札日だから行ってみなさい。」ということで、その日を待って行くことにした。

入札するのには、五万円の敷金がいると聞いていたので、里の兄のところへそのことを言っていた。それまでには間に合わせてくれることになっていたのに、その日が来て時間が迫っても、一向に里から使いの者の姿が見えない。いらいらしていたら、海渡校長先生が、それなら僕の金を貸してやろうといって、自転車で広銀まで走って行って用意をして下さったので、入札の資格を失わずお蔭で入札が出来たのである。

その入札を終えて外に出たら、里からの使いの甥の市川寿太郎の長男寿一が、リュックサックを背負って、五万円の小切手を持って馳せ付けてくれた。当時の五万円というと、随分たいしたお金である。肉親も及ばぬほど親身になって、海渡先生自ら銀行まで出しに行かれて貸して下さった真心に、何とお礼を申し上げてよいか言葉もなく、ただ有り難い心で胸がつまり、感涙の中から寿一の持って来てくれた五万円の小切手を、その場で先生にお返しさせていただいたのである。

入札の結果は、二万円の差で旧可部町に落札されたので、結局私は駄目だったのである。

その後、ずいぶん可部町を探して歩いたが、適当なものがなかった。古市町所有の元軍需工場だった建物があるということで、当時の古市町長加崎喜代三殿を訪ねて行ったところ、譲渡の意志はあるとのことで、その後三、四度役場に行ったり、町長宅を訪ねたりして、とうとう話を纏(まと)めて譲渡してもらうことになった。手付金を支払い、登記その他の手続を終えて、代金金額を支払って、学校の校舎が名実共に得られたのである。

さて、この建物を可部町へ持って帰ろうと思って土地を探して歩き廻ったが、手に入らない。そうしているうちに日時がたって三月の中旬がきた。しかし、何としても可部町で発足するのが私の念願なので、海渡校長先生にそのことを

申したところ、購入した古市の建物を可部町に持って帰る期間はどのくらいかかるかと聞かれた。三カ月くらいなら出来ると思うと申したら、「よし、三カ月なら高宮中学校の一隅を貸してやるから、ここで発足せよ。」と言って下さった。

学校の所在地が定まれば、設置認可申請書作成は完成する。前から準備していた申請書は、学校設置の目的、学則から施設設備、予算、教授陣等々、きめ細かい計画のもとに作成されていた。それを三月の末に安佐地方事務所の学事課に（担当は山中義雄先生）持参して説明したところ、「結構です。立派です。もう新年度も迫っているので直接県に持参されたら、万全を期される貴方のことですから、すぐ認可になりますよ。」と言われた。県庁に持参したら「いよいよやんなさるか、大いにやってつかあさいよ。貴方のことだから、きっとええのやんなさるだろうが、頑張りなさいよ。」などと、またここでも励ましの言葉をいただいて、ますます勇気が増してきたのである。

教授陣の方は、幸い私が勤めていたころの教え子に教員検定を取らせていたのが、あちらこちらの学校に勤めていたのだが、その中の一人で公立学校に十六年勤めていた新尾一枝教諭が、「先生が学校を創りなさるのなら、私は現在の学校を退めて先生のところでお手伝いをします。」と言ってくれたのである。しかし、あと一カ年で恩給になるのに、それでは可哀相なので、そのことを言うと、「そんな恩給など問題ではありません。先生の一生のことです。やります。役には立たぬが手伝わして下さい。」と、自分の恩給とか身分とかいったものを棒にふって自ら進んで来てくれることになった。その新尾教諭が和裁を担当した。一方、洋裁担当の人として、豊田郡木江町出身の藤原サダ子氏に来てもらうことにした。一般作法・茶華道として、大下高喜氏を依頼。一般教養学科は、長男武田学千が広島文理科大学二年生であったので、長男に協力させるとともに、それの友人の三浦富登氏（後、松江北高校長）に依頼した。家事科（食物・育児・看護）を私が担当することにした。

校舎に充当する建物の資金は準備できたが、校具・教具・図書等々まったく無からの出発なので、一通りは揃えね

ばならぬ。

しかし、この資金作りがまた一仕事、私の衣類持物一切を売って備品費を作ることにして、昔の教え子たちにその斡旋を依頼した。久地での教え子では、岡本アヤメ、高野ヨシ子、佐々木綾子、金本シズ子氏等、呉での教え子たちは新尾一枝、番本フサエ、竹並ユキエ、面谷ヒサエ、登根トモエ、折本シズ子、垣内フミ子氏等が、それぞれ我が事のようにして、皆一生懸命に協力して私を援けて下さった。この人たちの温かい心に強く感動し、感謝し、今もなおその御恩は決して決して忘れてはいない。

幸いに、終戦後の物資の少ないときなので、古い物でも飛ぶように売れた。しかし、より高価にと思い、そのままでなく更生して売るように努めた。たとえば、夏の絽の喪服の上下をワンピースに、羽織のスラセを子供物の着物とちゃんちゃんこに、毛糸物を解いて染め替えて、若い者向きのカーデガンに等々、それぞれ工夫をして出した。

こうして一方では資金作りに、また一方では備品の調達、机・黒板・ミシン（里から立派なシンガーを贈ってくれた）、教卓・下駄箱・戸棚・標本等、生徒百人分を用意した。箒（室内用、庭園用共）、雑巾等は手作り、もちろん、調理・作法等の校具・教具は、自分の物を一切出して足りないところを購入した。

このようにして、開校の準備も着々と進んでいるとき、県からの学校設置認可が二十三年三月三十一日付で下りた。さっそく、入学案内およびポスターを作って、生徒募集を始めた。募集期間は二週間しかなかったこと、初めてのことで募集の要領も分からなかったこと、また一面甘く考えていたことなどから、百名募集予定の生徒は、その五分の一にも満たない十八名の入学応募者であった。

可部女子専門学校の開校

昭和二十三年（一九四八）四月十五日、海渡和雄校長先生の御厚意と御協力により、三カ村組合立高宮中学校の一隅をお借りして、広島県可部女子専門学校の開校式を行った。

開校式の前日、古市に校舎として購入している建物から畳を高宮中学校までトラックで運んだとき、海渡校長先生自ら出てトラックから教室まで畳を運んで下さったことも忘れられない。そのように、前日は開校式の準備にも海渡校長先生自ら手をつけて色々とお世話下さったのであるが、開校式には何かお差し支えがあって、出ていただけなくて、他の先生が代理で来て下さった。

今にして考えれば、現在の武田学園の第一歩を踏み出す広島可部女子専門学校は、誠にひっそりした、ささやかな出発であった。

実は、前述の如くそのころから腰が痛むので、あちこちで診てもらったり、レントゲン治療もしてもらったのだが、結局、神経痛だろうということだった。年齢的にも神経痛の出るころなので大して気にもかけないで、出て歩くときは新聞紙か風呂敷を持っていた。腰がたまらなく痛むとき、それを地面に敷いて横たわるのである。

呉の教え子のところへ前述の衣類等の売却の依頼に行ったときも、駅のベンチに横たわっているところへ教え子たちが迎えに来て、私の身体を抱いて起こしてくれた。やせて衰えている姿を見て吃驚するとともに、痛ましく思ったのか涙を流して、私も懐かしいやら可愛いやらの涙、涙と涙の対面の場面、これも永遠に忘れられぬ一つである。

また、開校式をする以前の或る日、海渡校長先生から「武田さん、残念なことには貴方は県下では名の通った人だが、この安佐郡には貴方という者をよく知らない者が多いらしい。貴方にこの高宮中学校の一隅を三カ月貸与すると言ったら、三カ村の村長が、三カ月たって出てくれなかったらどうするのかと言うので、三カ村の村長のところへ挨拶にいって貸与期間の三カ月は守るということを話しておきなさい。」とおっしゃって下さった。もちろん、そんなご心配を村長や村の人々がなさらないにしても、当然挨拶にいくべきだったのだ。それに、そんな心配をなさっておられるということになればなお一層のこと、一時も早く行って「お約束は違えません。」といって安心していただかねばと

思い、八木・三入・亀山との三カ村へ痛む腰をかかえ、左の足を引きずりながら、徒歩でそれぞれご挨拶に廻った。

健康な者でもこの三カ村を徒歩で廻ることはかなり苦しいと思うが、緊張して学校を作ることのみ身も心も打ち込んでいるときであったので、それが出来たのだと、今にして思うのである。そのときも、道すがら何度となく新聞紙を敷いては身体を休めつつ廻ったことも忘れられぬ一つである。

昭和二十年五月、広島市舟入川口町から安佐郡緑井村に疎開していたころ、毎日緑井から可部まで通っていた。そのころ、腰の痛みは神経痛とばかり思っていたので、その痛みは風呂にでも入ったら少しは楽になるであろうと思い、銭湯などに行ったこともない私なのに、大枚（たいまい）の風呂銭を五円も出して可部町下之浜の銭湯に入って緑井まで帰ったこともあったが、一向に風呂の効目はなかった。

とにかく、こうして四月十五日の開校式までは色々と忙しい毎日を過ごしてきたのだが、前述の如く、開校式が終わったら安心と喜びでぐったりしたのか動けなくなった。それでも元気を出して一週間は学校に通った。しかし、どんなに元気を出そうと思っても、二週間目には全然動けなくなった。